

# 太宰 治 研 究

— 罪の意識について —

檜 垣 良 夫

ここでは、太宰における「罪の意識」が、いつ頃、何を契機として芽生えたか、ということについて考えてみたいと思います。

「生まれて、すみません。」というつぶやきから「死ねば一番いいのだ」という絶叫まで、罪の意識は太宰の一生をおおっています。それは、厳しい自己否定とそれにつながる自虐、並びに生涯かけてのデカダンな生活を導き、究極においては、死々を以てしか償うことができなかったのです。

太宰研究の第一人者である奥村健男氏は、「ほくには太宰の文学も生涯もすべて、コミニズムからの陥没意識、コミニズムに対する罪の意識によって律せられていると思えるのです。」として、罪の意識の萌芽をコミニズムの運動の中に捕えて美しく論証されています。

すなわち、コミニズムの思想を放棄し、運動から脱落し、転向した、その時から「裏切りの苛しやく」「逃亡者の苦悩」といった形

で「罪意識」を背負い、転落者としての太宰の運命が始まったというのです。この説は、現在かなり一般化されています。けれどもはたしてそうでしょうか。

太宰は、習作時代の弘前高校在学中には、「地主一代」「学生譚」などのコミニズムの思想を真向から振りかざした作品を残しています。けれども、遺書を書きつもりで綴った「思い出」を含む処女作品集『晩年』以後では、わずかに「葉」において「外はみぞれ、何を笑ふやレニン像」および『虚構の春』において「私は唯物史観を信じてゐる。唯物論的弁証法に拠らざれば、どのやうな些々たる現象をも把握できない。十年來の信条であった。」といった形でコミニズムについて語っているのみです。そして、このような形でのみコミニズムについて触れているのでしたら、確かに奥野氏の指摘されるように転向者の苦悩を靜かに味わっていたと言ひ得ると思えます。

けれども、『斜陽』において「正義？所謂階級闘争の本質は、そんなところにありはせぬ。人道？冗談じゃない。僕は知つてゐるよ。自分たちの幸福のために相手を倒す事だ。殺す事だ。死ぬゝという宣告でなかつたら何だ。ごまかしちゃあいけねえ。」と明らかに若き日の太宰を象徴する直治によって語らせています。さらに『虚構の春』において「私の解放運動など、先覚者として一身の名誉のためと言って言へないこともなく、そのほろで、どんどん出世してゐるうち、面白く張り合ひもございましたが、スパイ説など出て来たんでは、遠からず失脚ですし、とにかく、いやでした。」と自己の出世したいという願望を充す為のコミニズムの運動であったと語っています。スパイ説がただけでそれを否定しようとの努力もせず、「とにかく、いやでした。」というコミニスト。

このような太宰をはたして主体的にコミニズムの思想を自己の内部に確立していた其のコミニストであり、それから脱落したことにより「罪の意識」を背負わねばならなかった人と言へるでしょうか？

わたくしには、この時期——二十一才から二十二、三才——の太宰は、少々血迷っていたのではないかと思えます。青年期特有の、美しいもの純粋なものを求め憧れるという心理が、マルクス理論のもつ

決定的威力によって激しく蝕発されたのである。自分の楯を持たない不安定な自我が、マルクス理論に一時的に身を寄せることによつて自己防衛の手段としようとしたのです。そのようなものとしてコミニズムは、太宰に作用したのではないでしょうか。

また、「小学校四、五年ころ、末の兄からデモクラシイといふ思想を聞き、(略)私はその思想に心弱くうろたへた。」という経験を持つ太宰にしてみれば、やはり当時のマルクス理論に心弱くうろたえて、卑怯者呼ばわりされることに反撥し、自己の内心の弱々しさを嫌悪するが故に、といった形でコミニズムの運動に飛びこんだのではないでしょうか？

また、幼い頃から母に対しては、わびしい追憶しか持たず、父に関しては、ただ恐ろしい人だと感じていた太宰にしてみれば、肉親の愛、人の愛を求めめる気持は人一倍強かったでしょう。とすれば、肉親の愛を拒む「家」が儼然として立ちほだかっている場合、それに反抗したい気になるのは当然です。当時の非台法的なマルクス主義の運動は、その反抗の、かっこうな吐け口であったのではないでしょうか。

つまり、太宰のコミニズムへの参加は、きわめて倫理性のろすい、無自覚的なものであったと言ひ得ると思います。したがって、その苛烈な共産運動の最中に、自我というものを

を見つげ直したのです。自分の志向するものが、心弱きもの、生活苦の重荷を背負えるものが、気がねしい世の片隅につましく生きていくもの——そのような者への同情だ、と気づいたとき、人間を社会に役立つか役立たぬかという基準原理を以て裁断する思想から離れたのです。

コミニズムからの脱落ということは、やがて時と共に忘れられる運命にあったのです。したがってこのことから、**「罪の意識」**は生まれ得ないと断言できます。

年譜をみますと、昭和五年、二十二歳は次のようになっています。「秋弘高時代からの愛人小山初代が家出上京し、本所区東駒形に一室を借りて住ませた。長兄文治が上京し事を解決、将来夫婦にしてみらう約束で初代はひとまず帰郷した。十一月十九日、金木町同番地に分家す。同月二十六日夜、銀座にてカフェホリウッドの女給田部シメ子(夫は無名の画家)と識り、二十七日八日を本所、浅草、帝國ホテルなどですごし、二十九日江の島袖ガ浦に投身した。シメ子は死に、ひとり鎌倉恵風園に收容されたが、このため自殺幫助罪に問われ起訴猶予となる。」

この心中事件を扱つて文壇的処女作となつた**「道化の華」**において、太宰は、友人の口を借りて次のようにいつている。「うちでは、みんな女が原因だときめてしまつてゐた

が、僕は、さうではないと言つて置いた。女はただ、みちづれさ。」

とすると、自分のすてばちな気持を持って余して女を死の道連れにしたのならば、「自殺幫助」なんて生やさしいものではなく、「殺人」ではないかということになりませう。「道化の華」の冒頭に「友よ、僕に問へ。僕はなんでも知らせよう。僕はこの手もて、園を水にしつても。僕は悪魔の傲慢さも、われのみがへるとも。僕は死ぬ、と願つたのだ。」**「虚構の春」**で「地獄の女性より」の手紙として「罪です。女ひとり殺してまで作家たる栄光得て、ざまを見ろ、麻薬中毒者といふ一匹の虫。よもやかうなるとは思はなかつたらうね。」同じく**「虚構の春」**で「道化の華は人殺し文学であるか。」とさえ言わしめていませう。さらに死の前年に書かれた**「人間失格」**の中で、「忘れかけると、怪鳥が羽ばたいてやつて来て、記憶の傷口をその嘴で突き破ります。たちまち過去の恥と罪の記憶がありありと眼前に展開せられ、わあっと叫びたいほどの恐怖で、坐つてをられなくなるのです。」と異様で、不気味な雰囲気を感じさせ、ある何か具体的な事件を暗示しているような叙述があります。MURDERER 太宰治 //

太宰は津輕の北端の大地主の六男として生まれました。そこは田舎の旧い大きな家が、しばしばみせるように、極端に長男を大事にする家でした。太宰は、幼い頃から父母の愛情を余くといつていい程受けないままに成長しました。少しでも甘える素振りを見せれば、うるさいぞノといった形で冷たく拒絶されます。このようなごとの反動として、太宰はコミニズムとなごんごのです。また、芸者は愛人にも、妻に迎えようともしました。一見すれば、生家に対する反逆の姿勢も、その底に流れているものは、家に復帰したいという強い願望に他なりません。このことは太宰の作品のいたる所に明瞭に示されています。しかし、家族や親族の人達は太宰の本心が見抜けず、ぐうたらの方、手におえない無頼漢として、小山初代の上京をきっかけに分家すること宣言しました。このことは、太宰にとつてかなり強いショックだったでしょう。自分の子の真実が見抜けない親、世間の体裁ばかり気にしている兄や叔母達、太宰ならずとも、ヤケツになるでしょう。その上、この当時の太宰には、自分で生活を営もうという意志がありませんでした。まだまだ、「家」に「肉親」に甘えていたいという気分が多分に残っていました。上京し、革命運動に従って滅茶苦茶な生活を送っていても、生家からの経済的援助があったが故に救われていたのです。だから、「分家」を宣言されたということは先に述べたような精神的ショックを与えたと共に、生活するための物質的援助が断た

れたことを意味します。さらには、自ら生活する意志が薄弱ないしは皆無であった太宰とつて、間接的な「死」をも意味してしまいました。太宰は、二重に絶望を味わったことになりました。この時「ええい、面倒くさい、死んでやれノ」という気持にまで追いこまれたであろうことを想像することは、さして無理ではありません。特に青年時代においては、「自殺」を「処世術みたいな打算的なものとして考へてゐた」太宰にとってはなおさらです。問題は、こゝにあります。少くとも、一人の人間が死を賭けて、自己の真実を抗議する以上は、なんといえども考へなおしてくれらるであらう……と太宰は思つたでしょう。そのようなヤケな気持で飲み歩いてた時、たまたま、あるバアの女給と意気投合したのです。太宰の胸の内には、女を道連れにしたら……、これはセンセーショナルな事件である、家の者も少しは自分のことを考え直してくれらるであらうし、初代にしても己れの非を覚るかもしれないという一人よがりの考へがありました。同時に、自分のウツパンを晴らさんとして、女を殺してやりたいというエゴイステイックな、あまりにも自己中心的な意志が存在していました。

以前から漠然と認めていたエゴの醜悪さはこの事件をキッカケとして気がついた時、太宰は自分にいしれぬ恐怖を感じたのではないでしょうか？俺は、自分一人の満足を得たいがために、一人の女を殺したい、殺せうとまで思つたのだ。自己をこのような悪魔的な存在だ、と自覚した時から、太宰の苦惱は始まり、その意識が高められて、自己の存在することを「罪だノ」と感じたのではないでしょうか。したがつて、そのようなエゴイステイックな意志の下における心中事件——とくに皮肉なことに、女は死んで自分だけが生き残つたという事実——は「生涯の黒点」であつたでしょう。

とすれば、コミニズムの運動からの脱落到する臨没意識や罪の意識は、コミニズムという問題を離れたエゴイズムの問題として解して差支えないと思います。太宰が本当に入殺しをしたのではないかと錯覚させるような一連の叙述は、このエゴイステイックな自己に対して嫌悪を感じるがゆえに、罪だと感ずるがゆえに、人々に罰してもらいたための誠実な魂の告白に他なりません。

このような「罪の意識」を背負つた太宰の前に、やがて聖書が「許す」ものではなくて、「罰する」ものとして登場します。「汝の隣人を愛せよ。」という厳しい戒律は、太宰にあっては、文学活動も「芸術の美は所詮、市民への奉仕の美である」という風に、貧しき人々へのサービスだという形をとります。ひいては、「死」をもってその罪を償ふといった形で四十才の生涯を終えることにならるのです。

太宰と聖書との関係については、今後のわたくしの課題にしたいと思います。

(本学三年)